

要旨

本研究は日本人とアラブ人が負担度の異なる 6 つの場面で、力関係が異なる親しい先輩と親しい友達に謝罪者する・される場合、どのような事柄を意識するのか、その相違点を対照比較することを目的とした。データ収集の方法としては、Google アンケートで行い、日本人・アラブ人ともに 115 名に調査の協力を仰いだ。

対象とした謝罪意識は、「謝罪」「説明」「罪悪」「迷惑」「弁償」「許容」の 6 つで、負担度の異なる場面でそれぞれの項目を最低値 1～最高値 4 の間で評価するように指示し、最高値である 4 のみの数値を分析の対象とした。分析の結果、アラブ人が「説明」と「許容」の項目を強く意識する要因として、アラブ社会とイスラム教で重要視されているという要因が影響していると推論した。また、日本人が「謝罪」と「罪悪」を強く意識する要因として、武士の面目を大事にするという価値観を多くの日本人が無意識に大事にしているからだと考察した。

1.はじめに

本研究は、アラビア語を母語とするアラビア語母語話者（以下アラブ人）と日本語を母語とする日本語母語話者（以下日本人）を対象とし、両言語話者が謝罪をどのようにとらえるのかという謝罪意識の相違点を明らかにする。そして、明らかになった謝罪意識の相違点を、当該言語話者がなぜ強く意識するのか、その要因を考察するため、本研究では以下の 2 点を目的とし、この問題について考察する。

1: グーグルアンケートを用いて、日本人とアラブ人が各場面の負担度や親疎関係に応じてどのような謝罪意識を各場面で最も強く意識するのか・しないのか、その相違点を明らかにする。

2: 調査によって明らかになった日本人とアラブ人が最も強く意識する項目が、なぜ強く意識されるのか、その要因を考察する。

2.先行研究

E.ゴフマン（2002：57）は、「『謝罪』を、侵害によって壊された人間関係を取り戻そうとする戦略」と述べており、本研究における謝罪の定義もこれを踏襲する。

本研究における謝罪意識の定義は、NURIAHARISTIANI（2014）を参考に、「謝罪行動という相互行為の中で相手のインターアクションを評価する意識」とする。

日本人の謝罪意識に言及した先行研究として、池田（1993：13-21）は「日本語話者の謝罪は低い姿勢でひたすら謝る形をとり、説明や弁明は戦略として好まれず、特に目上の相手に対しては使われない」と指摘している。

アラブ人の謝罪意識に言及した先行研究として、アルモーメン (2010:63) は「アラブ人母語話者の謝罪は説明や弁明というストラテジーを好む、特に関係の近い人に対して、よく使う。」と述べている。

謝罪意識を詳細に分析した研究として、NURIAHARISTIANI (2014) がある。この研究では、日本語とインドネシア語を対象に、被調査者が謝罪者と被謝罪者の立場になった場合、両言語話者が「謝罪」・「罪意識」・「迷惑」・「説明」・「弁償」という5項目をどのように意識するのかを調査した。その結果、全場面で両言語話者ともに、被謝罪者よりも謝罪者の立場のときに5項目を強く意識する傾向が見られたと述べた。

またインドネシア語母語話者では、自分に対する意識と相手に対する意識の差が日本語のそれと比べて低く、自分が持つ意識と同程度の意識および行動を相手にも求めている可能性がある。

そして日本語母語話者に関しては、「説明」の項目と「謝罪」の項目は全場面で同程度に意識されているということが分かったと報告している。この結果は「日本人はあまり「説明」を行わない」という謝罪行動に関する指摘(池田 1993、阿部 2006 など)を支持していない傾向を示す。また、「弁償」の使用意識を見ると、謝罪の事柄が大きい場合の方が小さい場合より使用意識が高く、謝罪の事柄が大きい場合には相手に償う可能性が高いと考えられる。

3.研究方法

3.1. 調査協力者と調査期間

調査協力を求める被調査者の前提条件として、日本語を学習したことのないアラブ人とアラビア語を学習したことのない日本人を対象とする。言語学習歴を指定した理由は、アラブ人からは日本語の、日本人からはアラビア語の謝罪意識の影響を排除するためである。

本研究は団額の倫理審査通過後、Google アンケートを用いて実施した。アンケートは、アラブ人を対象とする場合はアラビア語のものを、日本人を対象とする場合は日本語で書かれたものを用意した。また、本調査の説明と倫理審査の承認紙、調査に対する協力の内諾書と Google アンケートへつながる URL と QR コードの書かれた書類を PDF で用意し、協力者に対して送信した。その後、内諾書にサインとアンケートの回答があった協力者の回答を有効回答とした。

アラブ人の被調査者は、ソーシャルメディアを利用し、インターネット上で調査協力者を募集した。ソーシャルメディアでは、身分を偽って回答される恐れもあるため、アラブ人の場合のみ学生証の写真も求めた。

アンケート回答期間は 2019 年 8 月上旬～9 月下旬までと設定し、ソーシャルメディアで協力者を募った。アンケート協力を申し出てくれたアラブ人は計 119 人であったが、そのうち有効回答は 115 人で、解答率は約 96% (115/119) あった。

学生の国籍は、サウジアラビア、エジプト、アラブ首長国連邦、スーダンの大学に所属しており、年齢は 18 歳～30 歳であった。学部 1～4 年生と大学院生 1～2 年生の学習者、計 115 名、学部生は 109 名 (1 年生 9 名 2 年生 12 名 3 年生 31 名 4 年生 58 名)、大学院生 6 名で、年齢は 18 歳～30 歳であった。

日本人の被調査者は全て T 大学に所属する学生である。募集方法は、教員から許可を得たうえでアンケートに関する書類を配り、授業終了後に回答してもらった方法と学内のカフェテリアで筆者が声をかけて集めた

方法の2つがある。アンケートは概ね10分～13分程度で終了した。

アンケート回答期間は2019年10月上旬～11月下旬までと設定した。アンケート協力を申し出てくれた日本人は計117人であったが、そのうち有効回答は115人で、解答率は約98% (115/117) あった。学部生と大学院生、計115名、学部生は107名 (1年生29名 2年生20名 3年生30名 4年生36名)、大学院生8名である。年齢は18歳～26歳である。女性は55名、男性は60名である。

3.2.調査における場面設定

Brown&Levinson (1987) によれば、フェイスが侵害される度合いは「上下関係」、「親疎関係」、「負担度」という3つの要素によって決まると指摘されている。そのため、これらの要素と日本とアラビアの社会において、学生の日常生活で問題になりやすい事例を考慮した上で、謝罪者と被謝罪者の立場を含んだ以下の6つの場面を選定した。

場面1 (負担大) : 親しい (先輩・友達) から、絶版になった本を、一週間で返す約束で貸してもらった。しかし、その本をなくしてしまった場合。

場面2 (負担中) : 親しい (先輩・友達) から、必ず返すことを条件に5千円借りた。しかし、一週間たってもお金を返すことができなかった場合。

場面3 (負担小) : 親しい (先輩・友達) とボーリングをする約束をしていた。しかし、当日の待ち合わせ時刻から15分遅刻してしまった場合。

場面4 (負担大) : 親しい (先輩・友達) に絶版になった本を一週間以内に返すという条件の下、貸した。しかし、その本をなくしたと報告された場合である。

場面5 (負担中) : 親しい (先輩・友達) に必ず返すことを条件に5千円借した。しかし、一週間たってもお金が返ってこなかった場合。

場面6 (負担小) : 親しい (先輩・友達) とボーリングをする約束をしていたが、相手が15分間遅刻してきた場合。

3.3.調査の対象とする謝罪意識

本調査で対象とする謝罪意識は、NURIAHARISTIANI (2014) を踏襲し、「謝罪」・「罪意識」・「迷惑」・「説明」・「賠償」の5つと、新たに追加した「許容」の計6つである。「許容」を新たに上げる理由として、アラブ社会では親しい相手の過失を許容する傾向があり、これが当該談話においても適用されるのか否かを明らかにするためである。また、日本社会において「許容」の項目が意識するのか否か、アラブ社会とどの程度の差が存在するのかを対照比較するためである。

対象とする謝罪意識は先行研究で取り上げられている意識を参考に、以下の謝罪意識を対象とした。

項目(a)～(f)は被調査者が謝罪者の場合、(A)～(F)は被謝罪者の場合の謝罪意識である。

(a) 謝罪すべきだと思うか (以下では「a 謝罪」と表記)

(b) 自分は悪いと思うか (以下では「b 罪悪」と表記)

- (c) 相手に迷惑をかけたかと思うか (以下では「c 迷惑」と表記)
- (d) 状況を説明すべきだと思うか (以下では「d 説明」と表記)
- (e) 相手に償うべきだと思うか (以下では「e 弁償」と表記)
- (f) 相手が自分の過失を許容してくれると思うか。(以下では「f 許容」と表記)
- (A) 相手は謝罪すべきだと思うか (以下では「A 謝罪」と表記)
- (B) 相手は悪いと思うか (以下では「B 罪悪」と表記)
- (C) 相手の行動が迷惑だと思うか (以下では「C 迷惑」と表記)
- (D) 相手は状況を説明すべきだと思うか (以下では「D 説明」と表記)
- (E) 相手は償うべきだと思うか (以下では「E 弁償」と表記)
- (F) 相手の過失を許容できるか (以下では「F 許容」と表記)

調査協力者には以上の意識調査項目に対して1～4段階の評価をつけてもらうよう指示した(1=最低値～4=最高値)。

4.結果と考察

本項で分析対象として取り上げるアンケートの回答は、1～4段階の評価のうち、最高評価である4(非常に思う)の回答のみを対象とする。1(全然思わない)と2(あまり思わない)といった謝罪意識に対する否定の項目を調査の対象としないのかということ、本研究は謝罪意識の項目を調査協力者が強く意識しているかどうかのみを明らかにすることが目的だからである。そのため、1(全然思わない)と2(あまり思わない)は、本項では取り上げない。また、3の(やや思う)をアラビア語にすると、する可能性もあるし、しない可能性もあるといったニュアンスになってしまう。そのため、1や2と同様に、強く内在化された謝罪意識ではないと本研究では考える。従って、本項で取り上げるアンケートの回答は、4(非常に思う)のみとする。

4.1.結果

立場	場面	対象	言語	謝罪	説明	罪悪	迷惑	弁償	許容
謝罪者	場面1	親しい先輩	日本	94.8	73.9	96.5	93	67	8.7
			アラブ	81.7	83.5	36.5	17.4	60.9	70.4
		親しい友達	日本	91.3	74.8	93	85.2	69.6	20.9
			アラブ	60	80	33.9	23.5	48.7	76.5
	場面2	親しい先輩	日本	90.4	81.7	85.2	72.2	68.7	14.8
			アラブ	39.1	67.8	21.7	9.6	28.7	74.8
		親しい友達	日本	84.3	78.3	80.9	75.7	58.3	27.8
			アラブ	37.4	60.9	22.6	13	33	74.8
	場面3	親しい先輩	日本	53.9	53	53.9	40.9	19.1	36.5
			アラブ	23.5	51.3	7	8.7	13	81.7
		親しい	日本	58.3	53.9	58.3	34.8	24.3	57.4

		友達	アラブ	22.6	42.6	8.7	11.3	13	79.1
被謝罪者	場面1	親しい	日本	69.6	65.2	57.4	54.8	46.1	22.6
			アラブ	42.6	63.5	17.4	13.9	24.3	80.9
		親しい	日本	65.2	64.3	56.5	58.3	51.3	29.6
			友達	アラブ	32.2	60	15.7	13	20.9
	場面2	親しい	日本	66.1	73.9	54.8	46.1	47.8	35.7
			アラブ	19.1	40.9	11.3	7.8	13	86.1
		親しい	日本	65.2	62.6	51.3	42.6	36.5	34.8
			友達	アラブ	13.9	36.5	7.8	4.3	7
	場面3	親しい	日本	20	24.3	18.3	16.5	10.4	59.1
			アラブ	14.8	36.5	6.1	6.1	7	84.3
		親しい	日本	26.1	27.8	19.1	13	13	60
			友達	アラブ	13.9	36.5	3.5	5.2	6.1

以上の結果から、自身の非礼・過失を謝罪するという場面で日本人が重視した項目は、日本人が謝罪と罪悪、アラブ人が許容と説明であった。以下では本研究で対象とした過失・非礼に対する謝罪場面において各被調査者が先述の項目をなぜ強く意識したのか、その要因を考察する。

4.2.両言語話者にとって最も意識された謝罪意識の要因

まず初めにアラブ人が説明と許容の項目を重要視するのかその要因を考察する。

アラブ人が負担度に関係なく「許容」を強く意識する理由として、*الاخلاق الإسلامية الحميدة* (イスラム教の道徳) が関連しているのではないかと考える。イスラム教では、相手の過ちを許容することは善行とされている。コーランには「許容」に関する文章が非常に多く存在している。ここでは以下のスーラ/Surah (章) の an-Nur というアーヤ/Ayah (文の番号) 22 を取り上げる。

قال الله تعالى: (وَلْيَغْفِرُوا وَلْيَصْفَحُوا أَلَا تُحِبُّونَ أَنْ يَغْفِرَ اللَّهُ لَكُمْ وَاللَّهُ غَفُورٌ رَحِيمٌ).

この文章を和訳すると、「神様はおっしゃりました。「彼らを許してあげなさい。あなたたちは神からの許しを望まないのか。」まさに神様は寛容にして慈悲深くあらせられる。」(筆者訳)となる。

このような表現がコーランには数多く存在するので、ムスリムにとって「許容」という意識は非常に重要な道徳の一つであると言える。本調査で対象としたアラブ人の国籍は敬虔なムスリムが多い国であったことから、この道徳を強く意識していたのではないかと推論する。

アラブ人が「説明」の項目を強く意識した要因として、アラブ社会で説明という行為が好まれているからだと推論する。アルモーメン (2010:63) も「アラブ人母語話者の謝罪は説明や弁明というストラテジーを好む、特に関係の近い人に対して、よく使う。」と述べており、アラブ社会では謝罪には説明が不可欠だと考えられている。そのため、「説明」の項目を強く意識したのではないかと考察する。

次に日本人が「謝罪」と「罪悪」の項目が強く意識された要因について考察する。

日本人が「謝罪」の項目を強く意識する理由として、日本の社会で謝罪という行為が非常に重視されているからだと考える。日本の慣用句の一つとして、「死んで詫げる」という言葉があるように、実際に重大な過失の責任を負わされた場合、この言葉を体現する事例が今も見られる。なぜこのような事例が生じるのかを

考察すると、日本人は自身の過失に対して、罪悪感を強く意識するからだと考える。鄭（2006:51）は「日本人は、「過失」をすると、他者の面目侵害をしたと台湾人よりもより感じて、謝罪すべきと感じる傾向がある」と報告している。

また鄭（2006:50-51）は「謝罪」は自他の面目の修復儀礼である Goffman, 1967」という考えに基づき、「日本人は自分に責任のあるような「過失」に直面するとき罪悪感を高く感じる」と報告もしている。本研究で対象とした場面はいずれも親しい相手に対して何らかの過失を与えた場面である。そのため、罪悪という謝罪意識が強く意識され、それに伴い、謝罪も強く意識されたのだと考察する。

「謝罪」は自他の面目の修復儀礼であるの（Goffman, 1967）という理論に基づいて謝罪の意味を考えると、謝罪という項目をととも強く意識する日本人は面目を大事にすると捉えることができる。この捉え方は、加地（1997）の「日本人は「名（形）」を優先する傾向がある」という指摘や、末田（1998）の、日本人の面目に対するとらえ方として「自分の社会的立場が社会から受け入れられるか否か」と報告とも近い。

なぜ日本人が面目を重要視するのか、その背景を歴史的観点から考察する。日本の歴史において面目を非常に重視したのは武士であった。武士は面目のためならば己の命をも懸ける存在であった。例えば、山本常友の『葉隠』を現代語訳した神子(2003:140-143)では以下のような当時の武士の面目に対する捉え方を象徴するような事例が書き留められている。

ある一行が飲酒によるいざこざで殺人事件を起こした。事件以前に帰宅していたが木塚の家来が、事件のことを知り、当事者たちのもとに向かいわざわざ自身もその場にいたと供述するように願い出た。その理由として、「主人である木塚は先に帰った主張を信じないだろう。そしてその主張が認められても卑怯者扱いされて、汚名を着たままま主人に殺される。それはいかにも無念である。同じ死ならば、人を切った罪で死にたい。もし承知しないならば、この場で腹を切る」といって、一向に承知させたが、取り調べで一行は経緯をすべて白状した。そして殿様をはじめとする評定の面々は感心し、彼を褒めた。

本論では面目の損傷による事件を『葉隠』の事例からのみ取り出したが、このような面目を守るために、武士が自身の命を懸ける事件は、武士が支配階級であった時代に度々起きている。

このような面目のために命を懸ける存在である武士を、同年代の人々は尊敬していたと宣教師たちは以下のように報告している。

「武士以外の人たちは武士を大変尊敬し（河野,1994:97）。」

また、武家という社会階級が公的に廃止された後も、新渡戸稲造が著した『武士道』が日本でも広まり、現代に至るまで受け入れられている。そして、現代においても新渡戸稲造の『武士道』や山本常友の『葉隠』、大道寺友山の『武道初心集』などがたびたび講演や論評で引用される例を目にする。

本論では新渡戸稲造の武士道が与えた影響や実際の武士の価値観との違いなどについては触れないが、このような歴史の事例から、日本人が古くから今に至るまで武士の価値観に尊敬の念を抱いていたと推論する。そのため日本社会において、武士にとって非常に重要な価値観である面目という概念が今なお無意識的に重要視されているのではないかと考える。そのため、自身の過失によって面目に傷がつくのを恐れ、その修復のために謝罪という方法が日本社会や日本人にとって好まれるのではないかと考察する。

5.まとめ

分析の結果、日本人が強く意識すると答えた項目のうち、場面や負担度・力関係に考慮せず強く意識された謝罪意識の項目は「謝罪」と「罪悪」で、アラブ人は「説明」と「許容」であった。アラブ人が「説明」と「許容」の項目を強く意識する要因として、アラブ社会とイスラム教で重要視されているという要因が影響

していると推論した。また、日本人が「謝罪」と「罪悪」を強く意識する要因として、武士の面目を大事にするという価値観が日本社会に内在しており、その価値観を多くの日本人が無意識に大事にしているからだとして考察した。今後の課題として、本研究で分析の対象としなかったほかの謝罪意識がおのおのの文化や歴史の影響を受けているものなのか否かも明らかにする必要があると考える。また、親疎関係や上下関係が違う場面でも同様の結果が確認されるかどうかを検討しなければならない。

引用文献

- 阿部加奈子(2006)『謝罪の日中対照研究』広島大学大学院教育学研究科言語文化教育学専攻日本語教育学専修 修士論文.
- アルモーメン・アブドラー (2010)『地図が読めないアラビア語母語話者、道を聞けない日本語母語話者』小学館.
- 池田理恵子(1993)「謝罪の対照研究—日米対照研究—Face という視点からの考察—」『日本語学』第 12 巻 11 号,pp.13-21.
- 王源(2009)「日中における謝罪言語行動の対照研究」『東アジア日本語教育・日本文化研究』12, pp.223-236.
- 加地伸行 (1997)『現代中国学』中公新書.
- 神子侃(2003)『新編葉隠』たちばな出版.
- 河野純徳 (1994)『聖フランシスコ・ザビエル全書簡 3 (全 4 巻)』東洋文庫
- 末田清子 (1998) 中国人学生と日本人学生の「面子」の概念とコミュニケーションストラテジーに関する比較の一事例研究『社会心理学研究』13,103-111.
- 藤森弘子(1996)「関係修復の観点からみた『断り』の意味内容—日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較—」『大阪大学言語文化学』5 号, 5-17.
- 三田了一 (1972)『聖クルアーン：日亜大役・注解』(abu 版) 日訳クラーン刊行会
<http://www2.dokidoki.ne.jp/islam/quran/quran000.htm> (最終閲覧日 2021.8.28)
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987) *Politeness : Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goffman, Erving. (2002) 『儀礼としての相互行為』浅野敏夫訳,法政大学出版局 (原書 1967).
- NURIAHARISTIANI (2014)「日本語とインドネシア語の謝罪行動の対照研究」広島大学大学院教育学研究科文化教育開発専攻博士論文 (日本語教育学分野) .